

会員の広場



1970年代末の英国の思い出

鹿戸 丈夫（東京）

ロンドン・オリンピックで盛り上がりつつあるが、今年には女王陛下下の即位60周年祝賀行事もあり、久々に英国が注目される年となった。私は1977年から2年間、英国に留学させてもらった。同年は女王陛下下の即位25周年の年で今昔の感に堪えない。

留学先のケンブリッジ大学は、ロンドンから列車で約1時間半の小さな町にある。その小さな町に20を超

えるカレッジが散らばっていて、大学が町にあるのか、大学の一部が町なのか、最初は錯覚するほどだ。学生はいずれかのカレッジに属して原則として寮生活を送る。寮といっても勉強部屋兼リビングに寝室が付いた個室が与えられ、日本の大学寮に比べ格段に恵まれていた。当時の英国は経済的には不振だったが、蓄積（ストック）の豊かさを改めて感じさせられた。

経済理論と政策の双方を専攻し、毎週異なるテーマについて少壮のエコノミストを囲み、2〜3人のグループで議論が行われた。事前に提出する各自のエッセイに基づき議論なので、毎回、真剣勝負の雰囲気があった。当時大学には、ジョアン・ロビンソン、ニコラス・カルドアなど英国を代表する著名な経済学者も（名誉教授として）健在で、限られた機会だが、それぞれ大学で特別講義が行われた。時折、ロンドン大学の森嶋通夫教授など外部から著名な学者を招いて公開講義も行われた。大御所が最前列に座って質疑をリ

ドするので、関心分野も経済学の領域を超えて、大いに知的刺激を受けることができた。

こうした活発な大学生活とは裏腹に、70年代の英国は総じて苦難の時代だった。経済、社会面では、内に炭鉱ストなど労働争議が多発し、外に国際収支困難のためIMFから融資を受けるなど、いわゆる「英国病」といわれる状況だった。

政治の世界でも、保守党と労働党の政権交代が頻繁に起こり、国営企業の民営化政策など大きな政策変更が多発した。当時の労働党内閣は議会対策に苦慮していたのみならず、与党内でも急進的労働組合の支持を受けた左派の圧力に苦勞していた。留学中の2年間に大規模なストライキや計画停電こそなかったが、消防士やパン屋のストなど、日本では考えられないような労働争議も起こっていた。「英国に留学して、経済の勉強になりますか」などクセ球(?)の質問に遭遇することしばしばだった(医学を学ぶには、病人が最

善の教材ですのぞ)などと返していたが)。

議会では、与党労働党が頑張っていたが、自由党の連立離脱をきっかけに、内閣不信任案が僅差で可決され、解散、総選挙を経て、保守党のサッチャー政権が誕生することになる。しかし、同政権が、79年から湾岸戦争の勃発する90年まで11年の長期政権になると予想していた英国人は少なかつたように思う。

考えてみれば、大学の中で経済理論や政策の議論に鍛えられる一方で、大学の外では政治の大きな転換や政策運営のダイナミズムを目撃するという、ある意味で、たいへん幸運な時期に英国に留学することができたともいえる。現代日本の留学生に、日本留学の感想を聞いてみたいものである。

英国の指導者は、かつては歴史や哲学を学ぶ者が多かった由。専門家優位の現代で、英国も様変わりとなっているであろうが、経済倶楽部では引き続き幅広い分野の知的関心を充たしてくれることを期待している。